

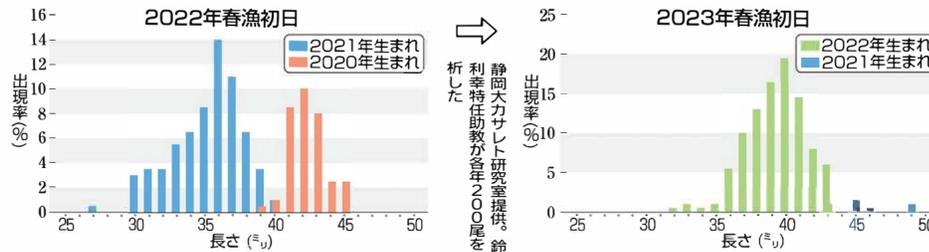
ニュースを追う

サクラエビは「復活」したのか



静大研究グループ

調順生育エビ稚回復長体



①2022年春漁初日に比べ23年は出現率のピークを記録した長さが4mm大きくなった
 ②22年春漁初日のグラフは「双峰型」。産卵期が遅れ、前年生まれのエビが十分に育っていない状態。23年春漁は「単峰型」に改善し、「通常の春漁」のグラフに戻っている

駿河湾産サクラエビは「復活」したのか。春漁初日の4月4日の水揚げ量は計約40トン(昨春(20)の40倍以上に達し、その後も漁獲量は安定的に推移する。静岡大創造科学技術大学院・ササナナリセンターの研究グループによれば、水揚げされたサクラエビの体長組成分析からも資源状況の改善は見られる。

「サクラエビ異変」取材班

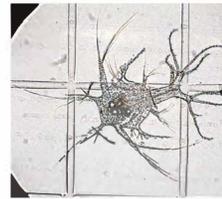
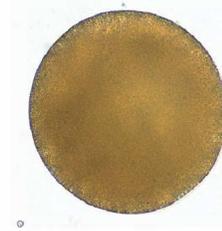


駿河湾産サクラエビの主産卵場の環境などを調べるためフィールドワーク中の静岡大研究グループ(手前左から、鈴木利幸特任助教、豊田圭太学術研究員、カサレト・ヘアトリス特任教授、鈴木款特任教授) = 2020年10月、静岡市清水区の由比漁港

県民の「ソウルフード」が戻ってきた。今年春の駿河湾サクラエビ春漁(漁期は6月9日まで)は初日に最大の水揚げ(5月8日現在)を記録した後は、4月27日夜までの計8回の操業でほぼ毎回十数トンから数十トンの水揚げを安定的に確保。これまでの総水揚げ量は1000トン以上、漁期中ですでに昨春(2022)の8割以上となった。価格は1kgあたり1500円(当り3万円)と、23年の春漁初日に水揚げされたサクラエビ200尾の体長を比較。今年と比較的サイズのサクラエビが多いことが分かった。昨

栽培漁業可能性探る

「タイやヒラメのようにサクラエビを栽培漁業で増やせないか」。カサレト・ヘアトリス特任教授らの研究グループは、温暖化など地球環境の変動下でも持続可能な伝統漁が成り立つよう、栽培漁業の可能性を念頭に幼生の生育実験を繰り返している。これまでに産卵期のアタマゴと呼ばれる個体を海で採取、2021年夏には水槽内でふ化した幼生から稚エビまで最長63日間生育することに成功した。



どこになるまでの一番弱い時期を陸上養殖などで育て、無事に外敵から身を守ることでできる大きくなつてから放流し、自然の海で成長したものを漁獲する漁業。県はマタイヒラメ、トラフグ、アヒ類の4種を放流対象にし、深海魚のキンメダイなどの種苗生産も試験的に行っている。ここに、近い将来再び訪れる可能性もある深刻な不漁に備え、サクラエビを加えられないか。

水槽でふ化 幼生育つ

最大1800個体の初期幼生「ウプリウス」のふ化を確認した。ふ化後4日目には太さが「エラフォカリス」となった。研究グループが最も得意なのは、エラフォカリスまで植物プランクトンを食べていたアタマゴの幼生が、次のステージの「アカントゾマ」に移る際、次第に動物食に転じ、植物プランクトンと動物プランクトンの両方を餌にするようになる食性変化への対応だ。アカントゾマになるエラフォカリスは1割程度しかおらず、餌となるプランクトンのサテスや割合などを現在検討中だが、徐々に生存率が改善されつつあるという。

①卵 ②24時間以内に卵がふ化し初期幼生「ウプリウス」が生まれる
 ③3~4日で「エラフォカリス」になる。この段階までは植物プランクトンを食べる ④さらに数週間で「アカントゾマ」も食べるようになる
 ⑤さらに数週間で成体のサクラエビに。ふ化から成体になるには1~2カ月かかる

(静岡大カサレト研究室提供)

蒲原沖海水に多量の海洋プラ

近年、海洋環境に及ぼす深刻な悪影響が指摘される「海洋プラスチック」。静岡大の三重野哲客員教授(実験物理学)は、静岡市清水区蒲原の沖合約1500mの海域で、サクラエビが産卵する水深50mより浅い海中に漂うマイクロプラスチックの分析を進めている。

これまでに計4回程度、毎回約20リットルの水を採取。微細な穴が開いているフィルターでこした後、特殊な薬液で残留物の中にある生物由来の細胞を溶かし、電子顕微鏡で観察すると0.01~0.2mm程度のマイクロプラスチックが1リットルの海水に平均千個程度存在した。

三重野客員教授は富山川河口などからのマイクロプラスチック流入の現状をさらに調査予定で、一般に海底にたまることされる比較的重い海洋プラスチックについても分析を進める意向だ。